

狂言と唸歌における英雄伝説の表現

The Expression of Hero Legend in Japanese Kyogen Play and Taiwan Liam kua-a Ballad

阿 部 泰 記*

Yasuki Abe

一 はじめに

日本の源為朝、中国の哪吒はいずれも地域を代表する勇者であるが、その物語は地域の文学形式によって表現が異なる。今回の東アジア国際学術フォーラム「東アジア伝統芸能の世界」で上演された山口鷺流狂言『首引』は『保元物語』の源為朝伝説にもとづき、台湾唸歌『哪吒鬧東海』は小説『封神演義』にもとづいた物語であるが、滑稽を趣旨とする狂言では、源為朝は得意な弓を用いず頭脳で鬼を翻弄し、海洋国の台湾では、哪吒は天界で暴れる『西遊記』の孫悟空と違って水宮で暴れる。本稿では両者を比較することによって、地域文学の特性を考察してみたい。

二 狂言『首引』

『保元物語』——鬼が島伝説

狂言『首引』の話は『保元物語』（13～15世紀成立）¹巻三「為朝鬼が島に渡る事並びに最後の事」にもとづいている。源為朝（1139～1170）は弓の名手で、鎮西（九州）で暴れて自ら鎮西総追捕使と称したが、保元の乱で敗れて伊豆大島へ流され、追討を受けて自害し

た超人的な英雄である。

『保元物語』では、為朝は鬼ヶ島で鬼の子孫に会い、大鎧を使って鳥を射殺すと島民は恐れて平伏する。為朝は宝物を要求するが、鬼の子孫は昔、鬼神であった時には宝もあり、人を食べていたが、今は果報がついて隠れ蓑などの宝物もなくなったと言う。

其鳥の勢は鴨程也。為朝是を見給て、件の大鎧にて木に有を射落し、空をかけるを射殺などし給へば、嶋の者共舌を振ておち恐る。汝等も我に従はずば、此の如く射殺すべしと宣へば、皆平伏て従けり。……嶋の名を問給へば、鬼が嶋と申。然れば汝等は鬼の子孫か、さん侯、扱は聞ゆる宝あらば取出せよ見んと宣へば、昔正しく鬼神なりし時は、隠蓑隠笠浮履剣など云宝有けり、其比は船なけれ共他国へも渡りて、日食人のいけ贅をも取けり、今は果報尽て宝も失せ、形も人に成て、他国へ行事も叶はずと云。

後に曲亭馬琴（1767～1848）は『保元物語』の記事にもとづいて読本『椿説弓張月』（1811）²を創作した。そこでは、為朝が鬼ヶ島に渡って島民の前で海中の岩を射抜いたため、島民は平伏すると記している。さらに島

* 山口大学大学院東アジア研究科

民たちは大鎧を引こうとするが皆将棋倒しになり、為朝主従はどっと笑う。この衆人が将棋倒しになる場面は後述する狂言「首引」と似通っており、あるいはその場面を借りたのかも知れない。

為朝は鎧矢とってきりきりと彎固め、高さ一丈に余りて、霸王樹めきたる巖の真中を、彊弗と射給へば、……巖は中よりさつくと折れ、……忽地水中へ撞と落れは、……島人等はこの形勢を見て色をうしなひ、只顧呆れてせんすべをしらず。……「彼も来よ。是も助よ」と叫ぶほどに、衆人も興に乗じて、……力を戮して彎に、弓はなほ撓もやらず。後よりはなほつよく引にければ、四男五郎は掌を搦破り、思はず握りし弦を放せば、衆人仰さまに崩れかゝり、象棋たふしに倒れしかは、為朝主従忍ぶに堪ず、「咄」と笑ふて已にけり。

『狂言記』——姫鬼との力比べ

為朝の伝説を継承した『首引』は「鬼狂言」に属する。「鬼狂言」は異類が人間の知恵や腕力に負ける倒錯の笑いを描写する。比較的早期の『狂言記外五十番』(元禄13年1700)³巻一「目録衣装付」十に収録された『くび引』は、為朝の鬼ヶ島伝説をそのまま反映しており、

鎮西八郎為朝が「くくりばかま、太刀、こしおび」姿で登場し、宝物を奪うため鬼ヶ島へ渡り、鬼と闘いに行くと言う。

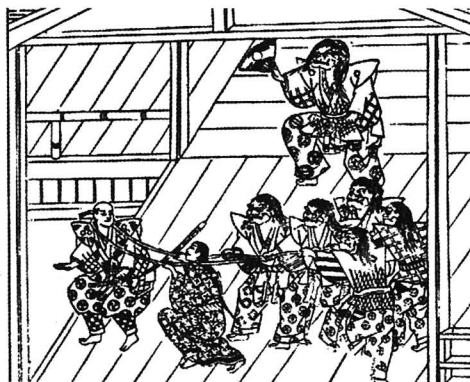
ちんぜいの八郎ためともとはそれがしが事じや、おれ程の力はよふ御ぎない、鬼が島へわたり、鬼どもと力くらべてして、たから物どもをとつて参らふ、いかな鬼も、おそらく力はおよぶまい

ところが為朝は鬼と力比べをするわけではなく、鬼が姫鬼に食い初めをさせるというように話が展開する。

鬼「人臭いが異な事じゃ、おのれは何者じゃ 八郎「娑婆の者じゃ 鬼「よい所へ来た、とって食わふ、姫に生きた人を食わせぬ、連れて来て、食いはじめをさせませう、姫姫 姫「なんぞ 鬼「来い来い、よい食べ物がある、あれあれ、食いはじめに食へ

為朝は親鬼を欺いて姫鬼を脅し、さらに姫鬼と腕押し(腕相撲)、すね押し(足相撲)を始めるのであり、強いはずの親鬼が姫鬼をかばって為朝を叱り、さらに首引をさせて、姫が弱いので眷属を呼んで姫を助けるという奇態を呈し、観衆の笑いを誘う。

姫「わんわん、あゝ、こはやこはや、おどしをる 鬼「憎いやつの、なぜに食われぬ 八郎「とがもない者を食わふとお



『狂言記外五十番』「首引」



山口篤流狂言「首引」

しやるは無理じゃ、勝負をして負けたらば、いかにも食われませうず、勝つたらば、宝物を取らふ…… 姫「あ、痛や痛や 鬼「をのれは姫が手を、なぜにきつうしたぞ、そろそろしはせいで、痛がるに 八郎「勝負に勝つた、宝物を取りませう…… 鬼「姫、すね押しせい 姫「あ痛あ痛 八郎「勝つたぞ勝つたぞ 鬼「いやいや、今一度首引をせい…… 鬼ども、みなみな出よ出よ、♪姫が方が弱いは ゑいさらゑいさら 姫が方が弱いは ゑいさらゑいさら ゑいさらゑいさら ゑいさらゑいさら ゑいさら

【鷺流狂言】——鬼に許しを乞う

狂言には江戸時代到大蔵流・鷺流・和泉流の3流があり、鷺流保教本⁴（1716頃）では、やはり源為朝が島（鬼ヶ島であろう）に来て鬼に会うことを描くが、『狂言記外五十番』収録本とは違って、為朝はなぜか鬼に許しを乞うている。

為朝「是ハ八郎為朝デ御座ル 去子細ウツテ此彼ト致ス程ニ 何トモ知レヌ島ニ着テ御座ル 是ハ何ト云フ島ジヤゾ……シテ「イデ喰ヲウ イデ喰ヲウ 為朝「喃 魔^{ナフ}敷^{オソロシ}ヤ 助^{タスケ}テ下サレイ

ただ為朝は実際には決して鬼を恐れているのではなく、注に「為朝ハツヨク恐ルル様ニナク恐ルル様ニシテ様子ウカ、イタル心持ニスル」と言うように、鬼を騙しているのであり、そこに言を弄して滑稽さを表現する狂言の特色が表れている。

鷺流保教本ではさらに、怖がる姫鬼を親鬼が説得して為朝に近づかせようとする場面を詳述し、わがままな娘に親鬼が手こずる様子を描いて観衆の笑いを誘う。

シテ「ソチハ終ニ生物ノ食初ヲセヌ程ニアレニヨイ物ガアル イテクヘ 姫「オ

リヤ イヤ コハイ シテ「イヤ コハイモノデハナイ トトモ爰ニ居ル程ニイテ喰ヘ

さらに為朝が大きく咳をして姫を脅す場面にも注を加えて説明する。

姫寄ルト為朝ツヨク咳ヲシテヲドス 姫「喃 コハヤコハヤ アレガ綴^{セキ}タ

親鬼は為朝に問い質すが、為朝は咳をしただけだと言い逃れる。

シテ「何トシタ 綴^{セキ}オツタカ ヲフカハイヤ 夫ニマテ ヤイ 汝ハナゼニ綴^{セキ}タ 為朝「イヤ ヲトシハ致サヌ 咳ヲ致タ 問返シテ 「夫ナラバ免^{ユル} カマヘテ綴^{セキ}ト聞カヌゾ

これらの場面には、『狂言記外五十番』収録本には描かれない為朝の智恵が描かれている。為朝はさらに扇子で姫鬼を敲いて、喰われまいと思わず遮ったといいわけし、腕押し、すね押しをして勝ち、最後に首引をして助けに出た鬼たちを引き回したうえ、突然縄をはずして鬼たちを将棋倒しにして去る。

このように観衆を笑わせる目的を持つ狂言においては、鬼退治をする源為朝の物語は、鬼との正面の対決を描かず、鬼の娘との腕押し・すね押し・首引といった遊戯に類する滑稽な勝負の場面を描き、為朝の頓知に騙される鬼の愚かさを可笑しく表現している。

徳山毛利本——蓬莱の鬼

なお徳山毛利家本⁵では、為朝は鬼ヶ島ではないが、宝物を手に入れるため蓬莱の島に行つて鬼⁶と勝負をするという似た内容を演じる。

為朝「是ハ鎮西の八郎為朝で御座る。日本に続力が御座らぬ程に。蓬莱の島へ渡り。鬼とちから勝負を致そふと存て罷出た。先急で参らふ。此度蓬莱の島へ渡り勝負に打勝。種々の宝物を取て帰朝いた

そふと存すれば。か様の大慶な事ハ御座
て社。

また首引きの場面では、為朝が突然繩をはずして鬼たちが将棋倒しになって観衆を笑わせる場面はなく、親鬼は鬼たちを呼んで加勢をさせるが負けて為朝を追うふりをしてすごと退散し、姫鬼が親鬼を責めながら後を追って退場するところに笑いの場面を設けている。

シテ「やいやい眷属ども眷属ども ツレ鬼皆々「出喰ふ出喰ふ出喰ふ シテ「姫が方へ加勢をせい ツレ鬼「畏て御座る
シテ「ゑいさらゑいさら ゑいさらゑいさら シテ「姫が方かよハひぞ。情をたせ鬼共 皆々「ゑいさらゑいさら。ゑいさらゑいさら シテ「やつとこやつとこやつとこな 皆々「ゑいさらゑいさらゑいさらゑいさらゑいさらゑいさら 為朝「なふなふ 嬉しやの 勝たぞ勝たぞ ツレ鬼「出喰ふ出喰ふ出喰ふ シテ「是ハいかな事 あの大ちやく物とらへて呉い。出くらをふ出くらをふ出くらをふ ヒメ「なふなふと、やと、や。わらハを此ごとくに打こかひて。どちへ御座るぞ。申申。先待せられい先待せられい

大蔵流本——鎮西ゆかりの者

大蔵流の虎明本⁷や虎寛本⁸では、武者は源為朝ではなく鎮西ゆかりの者とし、「為朝」と

注記しているが、武者は鬼ヶ島に宝物を取りに行くのではなく帰京の途中であり、播磨の印南野⁹に通るかかるとし、本来の為朝とは明らかに異なる。こうした変化が生じたのは武者が必ずしも為朝でなくともよいと考えられたからであろう。このたび山口鷲流狂言保存会によって上演された中西本¹⁰は、大蔵虎寛本に近く、武者が訴訟の事を終えて帰京する途中である¹¹としており、ますます為朝とは限らずともよいことを表している。いま三者の冒頭を比較して見ると、以下のごとくである。

ちなみに長州藩の狂言方は大蔵・鷲2流で、山口鷲流の宗家は明治28年(1895)に断絶した。山口鷲流の直接の元祖である春日庄作(1816-1897)は、もと大蔵流でありながら流儀を変えて¹²10代目鷲伝右衛門に師事した。中西治郎が春日庄作から継承した『首引』手付本が大蔵虎寛本に近いのは、各流儀のテキストが必ずしも宗家のものを使用するとは限らないということや、春日家の狂言本が古いものではなく明治以後の書写になるものであったためでもあろう¹³。

なお腕押し、すね押しによる決着については、『狂言記外五十番』巻三「目録衣装付」三「連雀」にも見られ、目代(代官)が出店争い¹⁴をする女と商人に腕相撲と足相撲の勝負をさせ、最初は女が腕相撲に勝ち、次に商人が卑猥なやり方で足相撲に勝つが¹⁵、三度目に女が相撲で勝ち、勝ち誇って退場するという滑稽

大蔵虎明本 (1642)	大蔵虎寛本 (1792)	山口鷲流中西本 (1800年代)
(為朝) 罷出たる者はちんぜい八郎ためものゆかりの者にて候 久しく西国に住申て候が、何とやらん都ゆかしうなりて候程に、いそいでのはらばやとぞんずる、はるはるのほるに依て、はりまの国いなみ野にて候、	(為朝) 是は鎮西の由縁の者で御座る 某訴訟の事有て久々西国へ下つて御座るが、此度訴訟も思ひのままに叶ふて御座るに依て、都へ登ふと存る。……是は何といふ野じやしらぬ。をを夫々は是は定て播磨の印南野で有ふ。	此は鎮西由縁りの者で御座る 某し訴訟の事あつて久々西国に滞留いたいて御座るが、此度訴訟思ひのままに叶ふて御座る程に 一先づ都へ登ろふと存る。……爰は何と云ふ所か知らぬ。イヤ是れは定めて播磨の印南野であるふ。

な話であり、男が女に負けるという意外な勝負の結果が可笑しい。

目代「さあさあ、腕押し、兩人ながら出てせい 二人「心得ました 女「勝つたぞ勝つたぞ 目代「やいやい、あまりじや、何ぞ、ま一度勝負せい 商人「すね押しを致しませう 目代「さあさあ、すね押しを今一度せい 女「心得ました 商人「勝つたぞ勝つたぞ 女「今のは知れぬ、相撲を取りませう 目代「一段よからふ、さあ相撲を取れ 商人「畏た女「お手つ、勝つたぞ勝つたぞ 商人「やいやい、今一番取れ今一番取れ 追つかけて入る

天正本「首引」——姫鬼が勝つ

16世紀の狂言本である天正本¹⁶には題名を明記しない「首引」に似た狂言がある。そこでは武者を為朝あるいは為朝の縁者とはせず、「おね山のあら三み」なる罪人¹⁷とし、鬼の娘と勝負をして勝つが、鬼の子どもが加勢すると、罪人も大勢には負けてしまい、鬼の娘が馬乗りになる¹⁸ところに笑いの場面を設けている。ちなみに全文は以下のとおりである。

ざい人一人出て、おね山のあら三みと名のる。鬼らんじやうで出る。ざい人をくわんとゆふ。ふ（せ）れふ。むすめにくわせんとてつれてくる。何にてもせうぶにてくわんれんとゆふ。う手をしする。女まける。又すねおしする。又まける。後くび引。^{ふへはやし}ひめが方がよはひぞ、ひめが方がよはひぞ。鬼の子ども出てすける。女勝。ざい人上へのぼる。とめ。

三 台湾唸歌『哪吒鬧東海』

『封神演義』——異常出生

哪吒は明代（1368～1644）の小説『封神演

義』¹⁹に登場する暴れ者であり、『哪吒鬧東海』説話は子供でも知っている物語である²⁰。

『封神演義』十二回では哪吒が異常出生する不思議な説話が創作された。すなわち彼が生まれた時、李靖の夫人は妊娠して三年半になっても出産せず、道士が夫人は麒麟の子をとりあげると言う夢を見た。彼はひとつの肉球から飛び出して来て、手に金の腕輪「乾坤圈」を持ち、腹に「混天綾」を巻いていたというものである。哪吒は自分が出生の時持ってきた宝物、紅綾「混点綾」で九湾河の水で体を洗うが、思わぬことに、その宝物の魔力で水宮を揺り動かしたため、巡海夜叉が彼を罵ると、彼は宝物の金の腕輪「乾坤圈」で夜叉をたたき殺す。そこで龍王の三太子が彼を罵ると、彼はまた三太子を殺し、三太子の背筋を引き抜く。

元配殷氏、生有二子。長曰金吒、次曰木吒。殷夫人後又懷孕在身、已及三年零六個月、尚不生產。……当晚夜至三更、夫人睡得正濃、夢見一道人。……道人曰、“夫人快接麟兒”、……只見兩個侍兒慌忙前來、“啓老爺、夫人生下一個妖精來了。”……只見房裡一團紅氣、滿屋異香、有一肉毬、滴溜溜轉如輪。李靖大驚、望肉毬上一劍砍去。劃然有聲、分開肉毬、跳出一個小孩兒來。滿地紅光、面如傅粉、右手套一金鐺、肚腹上圍著一塊紅綾、金光射目。這位神聖下世、出在陳塘關、乃姜子牙先行官是也。靈珠子化身、金鐺是“乾坤圈”、紅綾名曰“混天綾”。此物乃是乾元山鎮金光洞之寶。(夫人殷氏には二子があり、長男は金吒、次男は木吒と言った。殷夫人は後に又懐妊したが、三年六ヶ月経ってもまだ生まれなかった。……その晩三更になって、夫人がぐっすり寝ていると、夢に一人の道人が現れた。……道人は、「奥さん、早くお子さんを受け

取りなさい」と言った。……すると二人の侍女があわててやって来て、「旦那様、奥様が妖怪をお生みになりました」と言う。……すると部屋には紅色の気があふれ、部屋中に異香が立ち込めて、一つの肉球が輪のようにころころ転がった。李靖は大いに驚き、剣で肉球を斬りつけると、ぼんと音がして肉球が割れ、子供が跳び出した。地面には赤い光が立ち込め、顔は化粧をしたように白く、右手には金の腕輪をつけ、腹には赤い綾を巻き、金の光は目を射た。この神様が下界に降誕し、陳塘関に現れたのは、姜子牙の先鋒となるためであった。霊珠子の化身であり、金の腕輪は「乾坤圈」、赤い綾は「混天綾」である。これらは乾元山鎮金光洞の宝である。）

哪吒の出自——仏教の護法神

哪吒はもともとサンスクリット語 Nalakuvara または Nalakubala の漢訳であり、唐代(618~907)の仏典では「那羅鳩婆」²¹などと漢訳され、「那吒太子」「那摩天」と称される²²。彼は毘沙門天王の太子で、仏教の護法神であり、宝物「金剛杖」と「金剛棒」で悪人を打ち殺す。唐不空訳『北方毘沙門天王隨軍護法儀軌』²³には次のように述べる。

爾時那吒太子、手捧戟、以惡眼見四方、白仏言、……我護持仏法、欲攝縛惡人。或起不善之心、我晝夜守護国王大臣及百官僚、相与殺害打陵、如是之輩者、我等那吒以“金剛杖”刺其眼及其心。若為比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷起不善之心及殺害心者、亦以“金剛棒”打其頭。(その時那吒太子は手に戟を捧げ、鋭い眼で四方を見て、仏に申し上げた。……「私は仏法を護持し、悪人を捉えます。悪い心を起す者がいれば、私は晝夜国王・大臣及

び百官を守護し、相戦って殺害撲滅し、そうした輩は、われらが那吒は「金剛杖」でその眼と心臓を刺します。もし僧侶・尼僧・檀家・婦人に悪い心を起し心を殺害する者があれば、また「金剛棒」でその頭を打ちます。))

このように明代の小説『封神演義』における宝物で悪を懲らしめる哪吒像は、すでに唐代の漢訳仏典に創作されていた。

宋代(960~1107)に至ると、哪吒が真に法力を発揮できるようになったのは、両親に肉体を返して後であるという伝説が生まれた。南宋普濟『五燈会元』²⁴卷二「西天東土應化聖賢」には、次のように言う。

那吒太子析肉還母、析骨還父、然後現本身、運大神力、為父母說法。(哪吒太子は肉を割いて母に返し、骨を割いて父に返して、本領を現し、神通力を発揮して、父母に説法を行った。)

後に明刊『三教源流搜神大全』²⁵卷七「那吒太子」の中の解説では、彼が両親に肉体を返す原因を、彼と父との間で矛盾が発生し、血縁を断絶したからだとする。哪吒は道教の神であり、李靖の第三子に生まれ変わり、生後わずか五日で、東海で体を洗い、龍王を殺し、また魔女石記娘娘の息子を殺し、父李靖から叱責されたため、肉を切り取って父に返したと言うのである。釈迦は彼が妖怪変化を退治することができるので、彼を復活させた後、変化無窮、妖怪を懲らしめる神にする。

那吒本是玉皇駕下大羅仙。身長六丈、首帶金輪、三頭九眼八臂、口吐青雲、足踏盤石、手持法律、大噉一聲、雲降雨從、乾坤爍動。因世界多魔王、玉帝命降凡、以故托胎於托塔天王李靖。母素知夫人生下長子軍吒、次木吒、帥三胎那吒。生五日、化身浴於東海、腳踏水晶殿、翻身上寶塔宮。龍王以踏殿故、怒而索戰、帥時

七日、即能戰、殺九龍。老龍無奈何而哀帝、帥知之、截戰於天門之下、而龍死焉。不意時上帝壇、手搭如來弓箭、射死石記娘娘之子、而石記興兵。帥取父壇「降魔杵」、西戰而戮之。父以石記為諸魔之領袖、怒其殺之以惹諸魔之兵也。帥遂割肉刻骨還父、而抱真靈求全於世尊之側。世尊亦以其能降魔故、遂折荷莖為骨、藕為肉、絲為筋、葉為衣而生之、授以法輪密旨、親受木長子三字、遂能大能小、透河入海、移星轉斗。嚇一聲、天頹地塌；呵一氣、金光罩世；鐺一聲、龍順虎從；槍一撥、乾旋坤轉；繡球丟起、山崩海裂。（那吒はもと天帝に仕えた羅漢であり、身長は六丈、首には金の輪をはめ、三頭九眼八臂で、口からは青雲を吐き、足は盤石を踏み、手には法律を持ち、大声をあげれば、雲降り雨従い、天地が揺れ動いた。世界に魔王が多いため、天帝は下界に降りよう命じ、そのため托塔天王李靖の家に生まれた。母の素知夫人には長子軍吒、次子木吒があり、那吒は三子であった。生後五日して、東海に水浴し、水晶殿を踏み、身を翻して宝塔宮に上った。龍王は水晶殿を踏んだことを怒って戦いを求め、那吒は時に生後七日であったが、すぐに応戦して九龍を殺した。老龍はどうしようもなく帝に泣きつきに行くと、那吒はこれを知って天門で遮って戦い、龍を殺した。思わずそのとき天帝の壇に上り、手に如來の弓箭を取って、石記娘娘の子を射殺したため、石記は兵を起こした。那吒は父壇の「降魔杵」を取って西に出て戦い、これを殺した。父は石記が諸魔の領袖であるため、これを殺して諸魔が兵を起こすことになったことを怒った。那吒はそこで肉を割き骨を刻んで父に還し、靈魂を抱いて世尊の側

に救いを求めた。世尊も那吒が魔を降す能力を持つため、蓮を折って骨とし、藕を肉とし、糸を筋とし、葉を衣として再生させ、法輪密旨を授け、親しく「木長子」三字を受けたため、姿を大小に変化させ、河や海に入り、星を移り斗を回ることができた。大声をあげれば天地は砕け、一気呵成すれば金光が世界を覆い、鐺の音が響けば龍虎は従い、槍で撥ねれば天地は回転し、繡球を投げれば山海は崩れた。）

なお宋の蘇轍「那吒」詩一首（『樂城集』²⁶三集卷一）には、哪吒は愚かな狂人で仏も父も拝さなかったと言っている。

北方天王有狂子、只知拜佛不拜父。佛知其愚難教語、寶塔令父左手舉。兒來見佛頭輒俯、且與拜父略相似。（北方天王に狂子があり、仏を拝して父を拝することを知らなかった。仏はその愚昧さが論じがたいことを知り、宝塔を父の左手に挙げさせた。子が仏に見えると頭を俯せ、あたかも父を拜するようであった。）

小説『西遊記』²⁷第八十三回ではこの故事を発展させて、父を拝さない原因は、自分の肉体をもととの父に返したので、父とは血縁関係がないからであり、哪吒は李天王に復讐しようとし、釈迦が李天王に宝塔を送って、彼らを和解させたと言っている。

後來要殺天王、報那剔骨之雠、天王無奈、告求我佛如來、如來以和為尚、賜他一座玲瓏剔透舍利子如意黃金寶塔。那塔上層層有佛、艷艷光明、喚哪吒以佛為父、解釋了冤雠、所以稱為托塔李天王也。（後に天王を殺して骨を削った仇に報いようとしたため、天王はやむなく如來に救いを求めた。如來は和を尊び、彼に玲瓏と透き通った舍利子如意黄金宝塔を賜った。塔には毎層に仏がきらきら光っており、

哪吒を呼んで仏を父とさせ、仲直りさせたので、托塔李天王と称した。)。

小説『封神演義』は道教の色彩が非常に濃く、もとの故事に出現した釈迦はすでに現われず、釈迦の代わりに現れ李靖哪吒父子の間の矛盾を和解させるのは、道教の太乙真人が頼んでやって来た燃燈道人である²⁸。

道人喚李靖曰、「你且跪下。我秘授你這一座金塔。如哪吒不服、你便將此塔祭起、燒他。哪吒在傍、只是暗暗叫苦。道人曰、「哪吒、你父子從此和睦。久後俱係一殿之臣、輔佐明君、成其正果、再不言其前事。哪吒、你回去罷。」哪吒見是如此、只得回乾元山去了。……道人曰、貧道乃是靈鷲山元覺洞燃燈道人是也。……道人原是太乙真人請到此間、磨哪吒之性以認父之情。後來父子四人、肉身成聖。托塔天王乃李靖也。(道人は李靖を呼んで、「跪きなさい。こっそり金塔を授けるから、もし哪吒が承伏しなければこの塔を祭って焼きなさい」と言った。哪吒がそばで困ったと叫ぶと、道人は「哪吒よ、これから父と仲直りするのだ。後に同じ宮殿で仕える臣下として明君を輔佐し、正果を修め、もう過去の事を言わぬのじゃ。哪吒よ、帰りなさい」と言った。哪吒はこれを見て仕方なく乾元山に帰った。……道人は言った、「僕は靈鷲山元覺洞の燃燈道人じゃ。」……道人は実は太乙真人が招請して哪吒の根性を正して父を認めさせようとしたのであった。後に父子四人は肉体で聖人になった。托塔天王とは李靖である。)

作品では道教の宝物の魔力を描いており、哪吒は宝物「混天綾」を使って体を洗い、東海龍王の水晶宮を動かし、「乾坤圈」で巡回夜叉を殺す²⁹。

哪吒曰、「不妨。」脱了衣裳、坐在石上、把

七尺「混天綾」放在水裡、蘸水洗澡。不知這河是九灣河、乃東海口上。哪吒將此寶放在水中、把水俱映紅了。擺一擺、江河晃動；搖一搖、乾坤動撼。那哪吒洗澡、不覺那水晶宮已晃動的亂響。……夜叉來到九灣河一望、……大叫曰、「那孩子將甚麼作怪東西、把河水映紅、宮殿搖動。」哪吒回頭一看、見水底一物、面如藍靛、髮似硃砂、手持大斧。哪吒曰、「你那畜生、是個甚東西、也說話。」夜叉大怒、「吾奉主公點差巡海夜叉、怎罵我是畜生。」分水一躍、跳上岸來、望哪吒頂上一斧劈來。哪吒正赤身站立、見夜叉來得勇猛、將身躲過、把右手套的「乾坤圈」、望空中一舉。此寶原系崑崙山玉虛宮所賜太乙真人鎮金光洞之物、夜叉那裡經得起。那寶打將下來、正落在夜叉頭上、只打的腦漿迸流、即死於岸上。(哪吒は「かまわん」と言い、衣服を脱いで岩に座り、七尺の「混天綾」を水中に入れ、水に着けて沐浴した。ところがこの河は九湾河と言い、東海の入江にあった。哪吒がこの宝を水中に入れると、水は真っ赤に染まり、ちょっと振ると、江河が氾濫し、ちょっと揺らすと、天地が震動した。哪吒が沐浴すると、水晶宮はがたがたと音を立てて揺れた。……夜叉が九湾河に来て眺めると、……大声で、「あの子どもはいったいどんな道具で河の水を真っ赤にし、宮殿を震わせたのか」と叫んだ。哪吒が振り返ると、水中に顔は青く、髪は赤く、手に大斧を持った怪物がいた。哪吒は、「こいつ、何者だ、話してみろ。」夜叉は大いに怒り、「俺はご主人のお使いの巡海夜叉だ、俺をなぜ罵る」と言うや、水を掻き分けて一気に岸に飛び上がり、哪吒の頭めがけて斧を打ち下ろした。哪吒は裸で立って、夜叉が勢いよく来たのを見て身

をかわし、右手に着けた「乾坤圈」を空中に上げた。この宝はもと崑崙山玉虚宮所賜太乙真人鎮金光洞の宝物で、夜叉は堪えられず、宝物が打ち下ろされて夜叉の頭を当たり、夜叉は脳味噌が砕け散って岸辺に死にました。)

彼が夜叉を殺したのは、道教の宝物の神通力を用いることができたからであり、哪吒の師太乙真人は哪吒を弁護して、逆に龍王が天命を知らず、物事がわからないと批判している。

真人自思曰、“雖然哪吒無知、誤傷敖丙、這是天數。今敖光雖是龍中之王、只是布雨興雲、然上天垂象、豈得推為不知。以此一小事干瀆天庭、真是不諳事體。”忙叫、“哪吒過來、你把衣裳解開。”真人以手指在哪吒前胸、畫了一道符錄、吩咐哪吒、“你到寶德門、如此如此。事完後、你回到陳塘關、與你父母說。若有事、還有師父、決不干礙父母。你去罷。”(真人が思うに、「哪吒は無知とはいえ、誤って敖丙を傷つけたのは天命である。今敖光は龍の王で、雨雲を起こすに過ぎないとはいえ、天象が現れれば、知らぬふりをすべきではない。この些細な事で天界を汚したのは、真に道理に暗いやつだ。」そこで急いで、「哪吒、おいで。衣服のボタン

を外しなさい。」真人は指で哪吒の胸に符録を描いて言った。「お前は宝徳門に行つてこうしなさい。終わると陳塘関へ帰つて父母に報告しなさい。もし何かあれば、先生がいるから父母に迷惑はかけない。行きなさい。)」

歌仔冊『哪吒鬧東海歌』

哪吒が海を騒がす最も古い説話は上述の明刊『三教源流搜神大全』巻七「那吒太子」であるが、明無名氏『猛烈那吒三変化』³⁰第四折、阿難の台詞にも哪吒が怒った時には海の水を奔騰させると述べており、この説話の原型とも言える。

若論那吒的神威浩浩、志氣冲沖、怒時節海沸江翻、惱時節天昏地慘。(那吒の神としての威力は無限、志気は盛んで、怒った時には海や河の水が奔騰し、天地が暗くなる。)

この説話は後に独立した物語となった。それは台湾の歌仔冊『哪吒鬧東海歌』³¹、『李哪吒抽龍筋歌』³²である。現在なお活躍の楊秀卿氏の『哪吒鬧東海』³³は『哪吒鬧東海歌』に基づいて編集したものである³⁴。

三作品の冒頭部分は類似しており、次のように李靖が度厄に仙術を学びに行く場面から始まる。

黄塗版『哪吒鬧東海歌』	竹林版『李哪吒抽龍筋歌』	楊秀卿『哪吒鬧東海』
李靖帶在陳塘關 有學仙法粗未完 杜惠叫伊去下凡 去加紂王伊霸關	李靖帶在陳塘關 有學仙法小完全 杜惠叫伊去着下凡 去加紂王伊霸關	李靖帶在陳塘關 有學仙法初未完 度厄叫伊去下凡 去共紂王伊把關
黄塗版『哪吒鬧東海歌』	竹林版『李哪吒抽龍筋歌』	楊秀卿《哪吒鬧東海歌》
太子隨時去點兵 龜精好膽做頭前 沙魚相打展伊猛 蛤仔靠殼伊二平	太子隨時去點兵 龜精好膽做陣前 沙魚相打展伊猛 蛤仔靠殼伊二平	太子隨時著點兵 龜精好漢做頭前 鯊魚相扑展伊猛 蚶子靠殼兩片

歌仔冊『哪吒鬧東海歌』の大きな特徴は、龍王三太子が出陣兵を数える部分で、多くの魚が登場する。次のとおりである。

ほかに小卷、帰魚、鯉魚、海翁、白魚、龍蝦、蟬仔、丁轆、水尖、飛鳥、海提、海加走、海校、石降、鯉仔、暗串、海鵝、許蚶、海鰻、烏喉、脫西、芋仔、大沙、魴仔、海參、赤宗、東鏡、角仔、大目孔など、非常に多くの魚が登場し、まさに一篇の「魚類賦」の観を呈している³⁵。台湾は海洋国家であるため、このような魚類賦が現れたと言うことができる。

ちなみに『西遊記』三回においても、孫悟空が東海龍宮に兵器を求める場面があり、巡海夜叉が水晶宮の龍王に報告するが、そこでは龍王との戦闘は生じておらず、魚類も繰り出すことはない。これに対して台湾の歌仔冊『孫悟空大鬧水宮』二集では、小卷、同鏡、紅娘、沙魚、歴魚、海鳥、水鮎、免魚、温仔、海鰻、木則、海翁、花機、印魚、箭来、赤翼など数多くの魚類が出陣する。

小卷著驚放信號，同鏡集軍去貢鑼。紅娘武藝學上好，手執一枝赤銅刀。沙魚展猛不知愁，歴魚想卜箭頭功。肉職食聲化冤枉，海鳥氣甲亂亂藏。……（小卷は驚き墨で知らせ、同鏡は兵集めに貢鑼鳴らす。紅娘は武芸に習熟し、手に赤銅の刀執る。沙魚は猛烈止まるを知らず、歴魚は人より先に手柄を争う。肉職は威勢よく怨みをはらし、海鳥は怨んで隠れまわる。……）

ついでながら韓国のパンソリ『兎鼈歌』では、以下のように南海の龍王の諸臣を列挙している³⁶。これは同じ海洋国ならではの特徴だと言えよう。

左丞相の龜、右丞相の鯉魚、吏部尚書の鱸魚、戸部尚書の魴魚、礼部尚書の文魚、兵部尚書の秀魚、刑部尚書の峻魚、工部

尚書の民魚、翰林学士の鯨、諫議大夫のモチ、白衣宰相の鰈魚、金紫光禄の金魚、銀青光禄の銀魚、大元帥の鯨、大司馬の鯉魚、龍驤將軍のイムギ、虎威將軍の鯊魚、驃騎將軍の沢蟹、遊撃將軍の小蝦、蛤將軍の貝、鯉參軍の鯰、主簿の鼈、青州刺史の青魚、徐州刺史のソデ、兗州刺史の鯉魚、酒川太守の洪魚、清白吏の子孫の白魚、貪官汚吏の子孫の烏賊、腰長き鰻、鬚長き大蝦、穴なき全鰻、……。

*

なお哪吒は子どもの形象をしているため、その物語は児童にも人気があり、現在ではたくさん『哪吒鬧海』を述べた絵本が出版されている。ただし児童の教育を考慮して、その中の一部分を改編している。

たとえば台湾の『哪吒鬧東海』³⁷では、李天王が哪吒の廟をこわす場面と、それを怒って哪吒が李天王と戦う部分を削除している。

また中国の『哪吒鬧海』³⁸は、東海龍王を庶民に童男童女の生贖を要求する邪神に変えて、哪吒が悪い龍王を征伐する話に改めている。この童話が原作『封神演義』のストーリーを改編した原因は、児童が勇敢に邪悪に対抗する思想を育てるためであろう。そしてこの改編は哪吒が護法神であることからすれば、邪悪と戦う哪吒の形象を損じおらず、一概に否定はできない。元の雜劇『二郎神醉射鎖魔鏡』³⁹では、邪院主が二郎神と哪吒に命じ、牛魔王と百目鬼を捕まえさせる。明の雜劇『猛烈那吒三変化』では釈迦が哪吒に命じて焰魔山五鬼王と夜叉四魔女を捕まえさせる。京劇『哪吒鬧海』⁴⁰では龍の子は常に風と波を作り、旅人を傷つけたため、哪吒は激しく義憤し、すぐに海に入り龍の子を殺し、害を除く。

四 結び

源為朝はもと『保元物語』に登場して鬼ヶ島に渡り、弓の腕を披露して鬼の子孫を服従させた勇者である。その後、曲亭馬琴の読本『椿説弓張月』がその描写を継承し、鬼たちが皆で大弓を引こうとすることができずに将棋倒しになるという滑稽な場面を設定している。このストーリーは「狂言」の影響を受けたと思われる。「狂言」は笑いを提供する芸能であり、為朝の話では強いはずの鬼が負けてしまう転倒の笑いを描いており、源為朝は知恵を用いてわざと怖がるふりをして巧妙に鬼の娘を撃退する。鬼が娘に手を焼くさまも観衆に笑いを提供する。狂言では笑いを誘うことを趣旨とするため、勇者の力強さを描く際にも、決して武力を示すのではなく、腕押し・すね押し・首引という遊戯の場面を設定しているところが特徴である。

哪吒は唐代の仏教経典の中では毘沙門天王の太子で、宝物「金剛杖」と「金剛棒」を用いて悪人を懲らしめる。後に肉体を両親に返し、両親のために説法するという伝説が生ま

れ、父を拝さず、仏を父とする伝説が生まれた。明代にはその伝説は飛躍的に発展し、生まれてすぐに東海を騒がす伝説が生まれ、最終的に小説『封神演義』にまとめられて、その後の説唱文芸に大きな影響を与えた。この小説では哪吒が海を騒がす話で魚類は出現しないが、台湾の唸歌（歌仔冊）『哪吒鬧東海歌』では龍王の三太子が出陣する場面で魚類を多く登場させている。これは台湾が海洋国家であるためであろう。同じく海洋国家である韓国のパンソリ『兎籠歌』でも魚類が多く出現するのである。なお哪吒は子どもの姿をしているため、児童にも人気があり、絵本が出版されているが、哪吒と李天王が矛盾を発生した部分を削除したり、龍王が生贖を求め悪者のように改編したりしている。だが哪吒はもともと邪を駆除する神で、元の雑劇、京劇ともに同様の説話を演じており、この改編は決して不合理なものとは言えない。

このように日本と台湾の英雄物語は、趣旨や地域によって変化を見せながら観衆や聴衆、読者に受け入れられているのである。

〔注〕

- ¹ 本文は御橋惠言『保元物語注解（御橋惠言著作集一）』（1980、続群書類従完成会）によった。
- ² 『鎮西八郎が朝外伝椿説弓張月後篇卷之二』第十八回「海東の磯に一箭洲民を伏す、大児が島に三郎英雄を認る」。本文は後藤丹治校注『椿説弓張月』（1958、岩波書店『日本古典文学大系』56）によった。
- ³ 『狂言記』下（1930、有朋堂書店）、『新日本古典文学体系』58『狂言記』（1966、岩波書店）収録。
- ⁴ 天理図書館善本叢書と書之部第六十三巻『鷲流狂言伝書保教本四』（1984、天理大学出版部）収録。齋藤芳之助校訂『鷲流狂言篇』（1928、謡曲文庫刊行会）下篇収録。
- ⁵ 『山口鷲流狂言資料集成』（2001、山口市教育委員会編）収録。山口大学棲息堂文庫蔵。
- ⁶ ちなみに狂言『節分』では、蓬莱の島の鬼が豆

を捨うため日本にやってくる。

- ⁷ 池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究』（1973、表現社）収録。
- ⁸ 笹野堅校訂『大蔵虎寛本能狂言』（1943、岩波書店）収録。
- ⁹ 播磨の印南野については、大蔵虎光『狂言不審紙』秋「鬼のまゝ子」に、「此地今野中清水有所を証として、古へ曠野の様を見るに、明石郡の西より加古郡の東を掛て二里計りの間を云へし。」と言う。笹野堅校訂『狂言不審紙』（1943、改造社）。
- ¹⁰ 『山口鷲流狂言資料集成』（2001、山口市教育委員会編）収録。中西治郎旧蔵、山口県立大学蔵。
- ¹¹ 小林責監修・油谷光雄編『狂言ハンドブック』第3版（2008、三省堂）には、「遠国大名物」に、「訴訟も無事すみ、近々帰国するという設定のものが多い。これも当時、土地の所有をめぐる訴訟が多く、しかもその解決に長い時間を要した世相を

- 反映している」と説明する。
- ¹² 『鷲流狂言』（1978、文化庁文化財保護部無形文化民俗文化課）二「毛利時代の狂言」には、毛利藩狂言方六家の系譜を表示して、春日家が鷲流から大蔵流、さらに鷲流と転じるなど、大蔵三家、鷲三家とはいえ、途中で流儀を替えていることの多いことを指摘し、これは決して特異なことではなく、テキストなどは必ずしも宗家のものに依らず、上演が可能であると述べる。
- ¹³ 石川弥一編『山口に残存する鷲流狂言』（1957、山口市鰐石能狂言研究会）には、「春日家のものには古いものはなく、春日庄作自筆本及び庄作門弟の筆録本があるだけで、これらは大体明治中期以後の書写かと思われる。現在中西氏のところには、それらが取交えて七十曲ばかり残っているが、……雑然として心許ない状況である」と述べる。
- ¹⁴ 同類の狂言に『鍋八撥』があり、『狂言ハンドブック』第3版（2008、三省堂）には、「楽市・楽座令などにより、市が盛んに設けられた社会状況を反映した曲」として紹介する。
- ¹⁵ 『新日本古典文学体系』58『狂言記』の註釈には、天理本では「男まけになるによつて、女のまへへ足をふみこむ」ため、女が「すねおしにはまけませぬ共、……たまりませぬ」と言うところがある。芸能史研究会編『中世文化史料集成』（1975、三一書房）第4巻「狂言」に翻刻を収録する。
- ¹⁶ 天正六年（1578）奥書。法政大学能楽研究所蔵。『日本古典全書狂言集』下（1956、朝日新聞社）に翻刻を収録する。
- ¹⁷ 小山弘志等著『岩波講座能・狂言』（、岩波書店）V「狂言の世界」（129頁）には、田口和夫氏が「大内山の荒三位で源頼政か」と注する。小林保治・森田拾一郎編『能・狂言図典』（、小学館）「首引」（173頁）も同じ。
- ¹⁸ 末尾の「ざい人上へのぼる」について、『日本古典全書狂言集』本には「罪人の上へ上る（踏み据ゑる）の意か」と注する。前掲『岩波講座能・狂言』V「狂言の世界」（130頁）には「性行為を思わせる演技」と説明し、『能・狂言図典』（173頁）には「亡者は姫鬼の上に倒れる」と解釈する。今、『日本古典全書狂言集』本の解釈に従う。
- ¹⁹ 明許仲琳『封神演義』一百回。明金閻舒載陽刊本。第十二回「哪吒現蓮花化身」。
- ²⁰ 小児向け絵本に『哪吒鬧東海』（2006、台湾風車圖書出版社）、『哪吒鬧海』（2007、中国外語教育与研究出版社）、『哪吒鬧海』（2007、中国四川出版集團・天地出版社）などがある。
- ²¹ 北涼（397 - 439）曇無讖訳『仏所行讚』巻一「生品第一」に、「毘沙門天王、生囉羅鳩婆、一切諸天衆、悉皆大歡喜」という。『大正新修大蔵経』
- 巻四「本縁部」下所収。二階堂善弘「哪吒太子考」（1998、山田利明等編『道教の歴史と文化』、雄山閣出版、167～196頁）、蕭登福「哪吒溯源」（国立中山大学清代学術中心・新宮太子宮管理委員会主編『第一屆哪吒学術研討会論文集』（新文豊出版股份有限公司、2003、1～66頁）参照。
- ²² 『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、一九五八）「那吒天王」項参照。
- ²³ 唐不空訳『北方毘沙門天王随軍護法儀軌』一卷、『大正新修大蔵経』巻二十一「密教部」四所収。
- ²⁴ 南宋普濟『五燈会元』二十巻。
- ²⁵ 『三教源流搜神大全』七巻。
- ²⁶ 宋蘇轍『欒城集』五十巻、四部叢刊初編集部収。
- ²⁷ 『西遊記』百回本。
- ²⁸ 『封神演義』二十四回。
- ²⁹ 『封神演義』十二回。
- ³⁰ 『猛烈那吒三変化』、『孤本元明雜劇』（1958、中国戯劇出版社）所収。徐信義「論『鎖魔鏡』与『哪吒三変』雜劇」（国立中山大学清代学術中心・新宮太子宮管理委員会主編『第一屆哪吒学術研討会論文集』（新文豊出版股份有限公司、2003、371～400頁）参照。
- ³¹ 『哪吒鬧東海歌』（台北黄塗活版所）。陳兆南「台湾説唱の哪吒伝説」（国立中山大学清代学術中心・新宮太子宮管理委員会主編『第一屆哪吒学術研討会論文集』（新文豊出版股份有限公司、2003、489～526頁）に原文を掲載する。
- ³² 『李哪吒抽龍筋歌』（1990、竹林書局）。陳兆南「台湾説唱の哪吒伝説」（同上）に原文を掲載する。
- ³³ 洪瑞珍編注『哪吒鬧東海』（2002、台湾台語社）
- ³⁴ 台湾の唸歌は福建の移民がもたらした歌物語で、月琴・大広弦を伴奏楽器とし、「七字調」「江湖調」「都馬調」「狀元楼」「南光調」など民間の曲調を用いて語られる。唸歌は「歌仔冊」とも称し、従来テキストは存在するが、曲調が附されておらず、歌い方は明らかでなく、洪瑞珍氏（～2008）が楊秀卿氏の上演記録を文字化する過程で曲調を附された功績は大きいと言える。林仁昱「台湾唸歌之綜合論述」（本号掲載）参照。
- ³⁵ 各魚類については洪瑞珍編注『哪吒鬧東海』（2002、台湾台語社）に図解する。そのうち海翁、龍蝦、水尖、飛鳥、海鰻、海參、大目孔については『重修台湾県志』巻十二「風土志」土産・鱗之族などに記載がある。また中央研究院生物多様性中心魚類生態与進化研究室製作「台湾魚類資料庫」（<http://fishdb.sinica.edu.tw/chi/home.php>）参照。
- ³⁶ 姜漢永・田中明校注『パンソリ』（1982、平凡社、東洋文庫409）。ルビはカタカナに変えた。原文は姜漢永校注『申在孝パンソリ辞説集』（1984、教文社）、257頁。

³⁷ 『哪吒鬧東海』(2006、風車図書出版社)。

³⁸ 『哪吒鬧海』(2007、外語教育与研究出版社)

³⁹ 『二郎神醉射鎖魔鏡』、『孤本元明雜劇』(1958、

中国戲劇出版社)所収。

⁴⁰ 『哪吒鬧海』、『京劇劇目辞典』(1989、中国戲劇出版社)、20頁参照。